

2020年1月12日 説教「十日の間の苦しみ」

ヨハネの黙示録 2章 8~11節

新年礼拝では今年の御言葉を学びました。黙示録の学びにもどります。七つの教会に宛てられた手紙の二つ目の教会への手紙です。

1. スミルナの教会への手紙 (8節)

①スミルナの教会へ (8)「**また、スミルナにある教会の御使いに書き送れ。**」スミルナという地は、エーゲ海に面している海港都市で、商業地としてはエペソと並んで栄えました。また、農作物が育ちやすい土地で、美しい町並みを持っていました。そこで人口も多かったのです。そこに教会が備えられ、クリスチャンが生まれて言ったのです。今日では、イスラム教徒の国トルコにあって、クリスチャンが多い土地であるということです。その教会の御使いにとありますが、教会の指導者たちに宛てられた手紙です。

②初めであり終わりである方 (8)「**初めであり、終わりである方**」1章 17節「わたしは最初であり最後である」とありますし、1章 8節には「わたしはアルファであり、オメガである」とあります。ギリシャ語アルファベットの最初の文字はアルファで最後の文字はオメガなのです。神は創造主であり、終末を司られる方。歴史のすべてを総覧しておられる方です。時間を超えた存在者だからこそ、私達の歩みの一切をご存知なのです。

③死を経て生きられた方 (8)「**死んで、また生きた方が言われる**」聖書を読んできた方ならこれがどなたの事かはすぐにわかります。イエス・キリストです。キリストは神であるにもかかわらず、人となって生き、愛を尽くし、ついに十字架上で人間の罪の身代わりとなって死にました。しかし、三日目によみがえって 40 日間、人々の間に生きてくださいました。その後、弟子達の前で天に昇られて、私達を今でも見守って下っているのです。その方が言われるというのです。

2. 苦しみと貧しさのなかに (9節)

①苦しみを知る方 (9)「**わたしは、あなたの苦しみと貧しさとを知っている。**」スミルナの町が豊かであったのに反し、スミルナ教会に連なる者達は概して貧しさの中にありました。福音書を読むと、救われてくる人々の多くは、経済的な貧しさを持つ人々でした。また、病気や様々な悩みと苦しみを抱える人々がイエス・キリストの所にやってきました。ですから、このスミルナの地にあってもそのような人々がその悩みを理解してくれるキリストの教会にやって来て救いにあずかったのでありましょ。もちろん、経済的に豊かな人々に福音は備えられていないかということ、全くそうではありません。神の前にへりくだる者に福音は生きて働くのです。



②富んでいる (9)「**—しかしあなたは実際は富んでいる—**」経済的に貧しくてもスミルナ教会のクリスチャンは富んでいたのです。彼らは靈的には大いに恵まれていたからです。第二コリント 6 章 10 節にこうあります。「悲しんでいるようでもいつも喜んでおり、貧しいようでも、多くの人を富ませ、何も持たないようでも、すべてのものをもっています」。外的な貧しくても、その人は富む理由は、その人がより熱心に純粹に主の前に出るしかないからです。信仰深く生きるクリスチャンは貧しくても豊かなのです。ですから、逆に貧しさのなかにあって、神をののしり、神の前に出ようとしなければ恵まれることがないことはいまでもありません。

③サタンの会衆 (9)「**またユダヤ人だと自称している、実はそうではなく、かえって、サタンの会衆である人たちから、ののしられていることも知っている。**」スミルナ教会の人々のつらかったことは、彼らがユダヤ人からのののしられていたということもあります。そのユダヤ人たちはユダヤ人と自称しているのですが、神信仰に立たず、サタンに支配されていて、神の民としての特性を持たない人々でした。スミルナ教会の人々はそうした圧迫にもさらされていたのです。キリストはそのことも知っていたのです。

3. (10~11 節)

①恐れてはならない (10)「**あなたの受けようとしている苦しみを恐れてはいけません。見よ。悪魔はあなたがたをためすために、あなたがたのうちのある人たちを投げ入れようとしている。**」スミルナの教会は、実際に大きな迫害を受けました。多くの人々が殺害されたとも伝えられています。ヨハネの弟子であったポリュガルポスは火刑にされました。しかし、やって来ようとしている苦しみがあったとしても、主を信頼して恐れず、悪魔の策力に乗じることなく、歩んでいきなさいと勧められるのです。

②死に至るまで (10)「**あなたがたは十日の間苦しみを受ける。死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば、わたしはあなたにいのちの冠を与えよう。**」それではその苦しみはどれほど続くのか。十日の間苦しみを受けるというのです。であれば、迫害の途中で棄教することなく、死に至るまで信仰者として忠実に歩みなさいとうながされます。そして受ける冠は、この世の王冠やスポーツ優勝者が受ける冠にもまさったいのちの冠を受けます。

③勝利を得る者 (11)「**耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。勝利を得る者は、決して第二の死によってそこなわれることはない。**」「耳のある者は・・・」はエペソの教会にも言われたこと。信仰の勝利を得た者は、たといこの地上の命を失うことがあったとしても、永遠のさばきの時に、永遠の死を受けないことではないのです。彼らは永遠の命を与えられているからです。

《結論》

エペソの教会は忍耐しながらよくやっていたが、「初めの愛から離れてしまった」(4 節)と非難されています。ところが、このスミルナの教会に対しては、そのような注意は一切なされていません。という
ものこの教会は、これから大きな試練、迫害に遭遇することを主はよく
ご存知であったからです。

今からちょうど 40 年前の 4 月に、私は神学校を卒業して山梨県の甲府の開拓伝道に派遣されました。今考えれば、かなり無茶な話で、右も
左もわからず、その土地のことも知らない独身で訓練も不十分な者が働
きに出たのですから。伝道が開始されてから、しばらくして派遣の
た
めに推進力となってくださった小畑牧師 (2009 年召天) が礼拝説教者として来
ててくださいました。その時に語られたのが、今朝の聖書箇所
で

「十日の間」というメッセージでした。あとでそこにいた信徒の方が、「あれは先生 (私のこと) に語られたメッセージですね」と言ってお
ら
れたが、ある面ではそうだったのだと思います。

その時にも語られたことですが、いかに試練や苦難があるとしても、それらは十日の間なの
なことです。一日でも一週間でもなく十日だということ。それなりの長さです。しかし、それ以上ではない
と

いうこと。それは励ましのメッセージでありました。今、私たちが
も
覚えましょう。現在の苦しみや悩みの中に、おかれていることがあつ
た

としも、十日を越えることはないのだということ。それが実際の
と
ころは、どのぐらいになるのかは、それぞれによって異なるでしょう。しかし、必ずや道は開かれてくるのです。

私自身がこれまでの伝道者生涯を振り返ってみると、確かにたくさん
の試練や苦しいことはありました。しかし、それらをあわれみによ
つ
て、越えさせてきたこと、また試練にも増す主の恵みがあったことに
よ

り進ませられてきたことを感謝しています。しかし、改めて考えさせ
ら

れていることは、私は果たして、それらの問題に真正面からぶつかっ
て
きたらどうかということです。信仰をもってそれらと相対してきただ
ろうかということです。おそらく、これからの年月は私にとりまし
て
は、伝道者としての総決算になって来ます。あのヤコブが取り組んだ
「終生の使命とエサウとの課題」のごとく、正面から関わっていき
たい
と思っています。

あなたは、このスミルナの教会に与えられたメッセージはどのよう
に受け止められるでしょうか。「あなたがたは、世にあっては患難があ
ります。しかし、勇敢でありなさい。わたしはすでに世に勝ったので
す。」

(ヨハネの福音書 16 章 33 節)。ともに戦ってくださる主が勝利を宣言
してくださったのです。問題がいかに難しかったとしても、主に信頼
し
て、勇気を与えられて進んでいこうではありませんか。